

# 化学分析に負けた

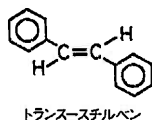
## 偽造ヒトラー日記

理工学部教授 宗 像 恵

### 偽造ヒトラー日記

西独の週刊誌シュテルンの記者ハイデマンが、ヒトラーの日記を東独で発見したというニュースは、世紀のスcoopとばかり世界のジャーナリズムを震撼させた。しかし、1か月足らずのうちに日記は贋造であることがわかった。偽造者のナチ資料収集・販売業者は逮捕され、シュテルン元記者のハイデマンも詐欺容疑で逮捕されるに至り、世紀のスキャンダルと化した。贋造であることの決め手となったのが化学分析であった。

紙を溶かして、薄層クロマトグラフィーで分析してみると、トランススチルベンの誘導体がみつかった。これは



1955年ごろから、紙を白く仕上げるために使われている蛍光白色染料なので、ヒトラーの日記が、1932年から1945年の間に書かれたというのはうそになる。これだけで十分と思われたが、さらに、製本に使われた糊を赤外スペクトル分析で調べると、

ポリビニルピロリドン

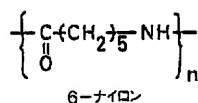
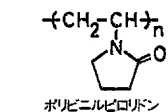
が検出された。これは

第二次世界大戦以後に

接着剤の1成分として

使われるようになったものである。また、ノートのとじ糸を調べたところ6-ナイロンが使われていることがわかった。

これも1955年以前につくられたものでないことの証拠となる。



西独連邦文書館は、化学分析と同時に内容も検討し、1962年に出た本の引写しである動かぬ証拠もつかんだ。一時は、英国のタイムズ社も大枚を払ってシュテルン社と連載の契約を結ん

だ。学者や鑑定家も振り回された事件であった。まず化学分析をすればよかったのと思われるが、本物と信じたい心が関係者を支配していたのではないだろうか。

### 書籍と猛犬は鎖につなげ

学生時代に、指導教授に始めて研究テーマをいただいて、希望と不安の中、文献調査に、外国語の専門ジャーナルがびっしり積まれた書架が林立する図書館(室)に足を踏み入れた時のあの圧倒されるような感激を経験された方は多いと思う。筆者にはこれに加えて、もう一つ忘れられない印象がある。戸びらのすぐ近くに書見台(本を斜めに立てかけて、立ったままの姿勢で読む机)が一つあり、それにはなんと頑丈な鉄鎖でつながれた大きな古びた英語の辞書が置かれていたのである。ウェブスターが編集した英語辞書であることを知ったのは後日のことであった。ある先輩の話によると、ウェブスターの辞書に記載されていない語彙を用いた英語の論文を書いて持って行くと、当時の化学のある教授にすごくしかられたそうである。

ところで、ヨーロッパの大学ができたころは、本一冊が現在の貨幣価値にして数百万円もした。例えば、書二冊と畑付きの家屋敷と同値だったという話も残っている。羊皮を薄くなめした上に一字一字を手書きして、金銀宝石を使って装幀したのだからそれも当然であろう。学生たちは読書といえば図書館に行くしかなく、それ以外は不可能だった。本がこのような安くなった現代の図書館でも、紛失・切取りが後を絶たないようだ。まして本が超高価な当時だ、貸し出してネコババされたら、大損害となる。それで、本は書見台に厳重に鉄鎖でつないで、公開した。今日でも大型のグラフ雑誌などは、平らに積み重ねられていることが多い。昔の本は一般に大型だった。クォートフォリオは、元来が一頭の羊の皮を四つ折りにしただけのサイズである。

このシステムはイギリスのオックスフォードが1320年に始め、翌年は早くもパリのソルボンヌ大学や大学以外の図書館がいっせいに採用したというから、逆に考えればいかに盗難が多かっ

たかを示している。だから当時の図書館というのは、この書見台の集まりだったのである。もっとも蔵書も多くはなく、千冊も置いてあれば超A級といわれた時代であるのでこの方式も可能だった。私たちは今、壁に書棚を取りつけて、本を隙間なく立てて並べている。最初にこの方式に切り替えたのは、イスパニア国王・フェリペ二世が1582年に完成したエスコリアル宮殿の図書室だった。王宮ならまさか万引もあるまい。それに、活版印刷術も発明されてすでに一世紀、用紙の大量生産も進んで本も小型になり、そしてかなり安くなっていた。二十年ほど遅れてミラノのボロミニ枢機卿のアンブロジーアナ図書館もこの方式を取り入れた。しかもこの図書館は一般公開したにもかかわらず、本を鉄鎖でつないでないというので全ヨーロッパが驚嘆したという。

### 引用回数の最多論文 100編

学術論文をどう評価するかはむずかしい問題である。独創性や他への影響などがいわれているが、数字で示すわけにいかない。ここ10年ほど定着しているひとつの尺度は、他の論文に引用される頻度である。これとても、研究者数や流行の度合にいちじるしく依存し、多いからいいともいえない。しかし、一応の目安になることは確かである。1961年から1982年にかけての最多引用論文100編のリストが1984年に公開さ

れた。おどろくべきことに生化学や細胞生物学関係が9割を占めている。20年間に発表された2000万編近い論文のうち、50回以上引用された論文はわずか1%しかない(表1)

たった1回しか引用されない論文が6割を占めている。10回未満の引用数の論文が全体の9割である。ある研究者が論文をつづけて発表すれば、自分の論文を引用するであろうから、10編の論文のうち9編までは自己満足のなものにすぎないことになる。

さて、最多引用論文はFolin法で有名なタンパク質定量法の論文でじつに100639回におよぶ。第2,3位は、LaemmliやWeber, Osbornの電気泳動についてのもので、それぞれ16872回と15189回引用されている。Reynoldsの電子顕微鏡用染色剤クエン酸鉛の論文は、第5位にランクされている(13907回)。このように、ひろく用いられている技術関係の論文が多く引用されている。これに対して、ノーベル賞の対象となったHodgkinとHuxley(1952), JacobとMonod(1961), de Duve(1955)らの論文の引用回数は2000台である。

ところで、この最多引用論文リストに日本人の名のあがっている論文は3編みられる。その中の2編はアメリカでなされた研究の共著である。真の意味の日本産は大村恒雄・佐藤了両教授によるチトクロムP450に関する論文(1964)で、3236回引用されている。

表1 論文の引用回数 (1961~82)

引用回数	論文数	%
> 5000	20	*
2000~4999	80	*
1000~1999	334	*
500~999	1,500	*
100~499	45,000	0.3
50~99	145,000	0.7
25~49	393,000	2.0
15~24	558,000	2.9
10~14	656,000	3.4
5~9	1,690,000	8.8
2~4	4,562,000	23.7
1	11,228,000	58.2
合計	19,287,934	100.

\* < 0.01%以下。

